

第5章 NPO 法人子育て広場きらら

～子育て支援で大切なこと～

はじめに

その集会場は、たくさんの親子でゴった返していた。子どもたちは、おもちゃで遊んだり、走り回ったり、テラスのビニールプールに入って水浴びをしたり、思い思いに過ごしている。そんな子どもたちを眺めながら、お母さんたちは、よもやま話に花を咲かせている。部屋の片隅では、「おもちゃのお医者さん」と呼ばれる年配の方が、子どもたちのおもちゃを黙々と修理している（右写真参照）。



これは、津田の都営アパート集会場で毎週月曜日に開かれている子育て広場の風景である。この広場を主催しているのは、「NPO 法人子育て広場きらら」（以下「きらら」と略）である。「きらら」とは、一体どのような組織なのか。そして、「きらら」の活動からどのようなことを学ぶことができるのか。本章では、「きらら」の実像に迫っていく。

1. 「きらら」の概要

（1）活動のきっかけ

2001年3月に始まった「きらら」。代表の野村貴子さんに、活動をはじめたきっかけを聞いてみた¹⁾。

野村さんが活動をはじめた背景には、自分自身の苦い子育て体験がある。苦さの原因の一つは、引っ越しである。約10年前、野村さんは、夫と生後4ヶ月の赤ちゃんの家族3人で、小平市に引っ越してきた。東京の下町出身の野村さんは、生まれてからずっと家族や近隣の人達に助けられて生活し、また子どもが生まれてからも、わずか4ヶ月とはいえ、周囲の支えがあり子育ての大変さを感じたことがなかった。それが、引っ越しをして、地縁・血縁のないなかで核家族になった途端、急に子育てが重くのしかかってきたという。孤独とともに育児不安が増大する。「かわいくていとおしい存在であることには間違いないのに、なぜか苦しい、寂しい²⁾という思いに駆られた。

もう一つの原因は、小平市の地域特性に関することである。小平市は、人口約18万人で、都心へのベッドタウンとなっている緑豊かな街である³⁾。野村さんが引っ越してきた当時は、小平市の子育て支援の重点は、保育所の待機児童解消に重点がおかれ、専業主婦の子育て支援にまで手が回っていなかった。家庭での子育ては母親がやって当たり前という風潮のなか、児童館さえなく「家にいると泣き通しの息子との時間がとても長く感じられるため、なるべく外に出たくって、今日はダイエー、明日は西友、あさっては公園、その次は・・・」と、「私は毎日行くあてもなくスーパーを巡って歩き回っていた⁴⁾。支援体制が十分ではなく、専業主婦の育児には冷たい地域であったのである。

縁もゆかりもない土地で孤独感にさいなまれ、行く当てもなくさまよう親子。これが、野村さんの子育ての原体験として強烈に残っている。その時の苦しさこそ、活動をはじめたきっかけとなった。「代表と副代表の子育てに関する様々な経験・活動から、小平市では何が足りないか、自分たちが何がやりたいかを考えたら、今の（「きらら」の）形が必要だと感じた。自

分たちの子育てが、一段落していることから、本格的に活動を開始しようと話し合い、まずは2人で始めた」⁵⁾のである。

(2) 活動内容

「きらら」の主な活動は、以下の5点である。第1に子育て中の親とその子どもが遊びに来る場所(「子育て広場」)の提供である。全部で8箇所で開催している(それぞれの開催場所と開催日時等は表1を参照)。対象者別にみると、津田、白梅、ダイアパレスの会場では、乳幼児と保護者を対象にしている。中央、はなこ、三小、スペースクッションの会場では、0歳児と保護者を対象としている。また、母親にゆっくりとした時間を持ってもらうために、子育てサポーターが子どもを預かるという「ママきらら」も実施している。

表1 「きらら」子育て広場一覧

会場	場所	開催日時	主な対象	開始時期
きららin津田	都宮津田町1丁目アパート集会場	毎週月曜日 AM10:30~PM12:30	乳幼児と保護者	2001年3月
きららin白梅	白梅学園短期大学	毎月第1火曜日 AM10:00~PM12:00	乳幼児と保護者	2004年11月
きららinダイアパレス	ダイアパレス花子金井Ⅱコミュニティルーム	毎月第2金曜日、第4火曜日 AM10:00~PM12:00	乳幼児と保護者	2005年6月
ベビーきららin中央	中央公民館	毎月第4金曜日 AM10:00~PM12:00	0歳児と保護者	2002年4月
ベビーきららinはなこ	高齢者館「さわやか館」	毎月第3水曜日 AM10:00~PM12:00	0歳児と保護者	2002年4月
ベビーきららin三小	小平第三小学校	毎月第3木曜日 AM10:00~PM12:00	0歳児と保護者	2008年9月
スペースクッションベビーきらら	高齢者館「ほのぼの館」	毎月第2火曜日 AM10:00~PM12:00	0歳児と保護者	2004年4月
ママきらら	中央公民館	不定期 AM10:30~PM12:30	乳幼児と保護者	2008年4月

第2に、「きらら通信」の発行である(図1参照)。毎月1回、約800部発行している。子育て広場のスケジュールや小平市の子育て情報等が載っていて、公民館や地域センター等で無料配付している。

第3に、ホームページ運営である。ホームページには、「きらら」の紹介や、子育て広場の活動報告が随時アップされている。また、掲示板での交流や、地域の子育て情報等も発信している。さらに、代表の日記サイトもあり、子育て広場のこと、小平市の子育て事情、自身の育児日記等が紹介されている。

第4に、白梅幼稚園との共催によるイベント「きららパーク」を年1回行っている。幼稚園の先生方による催しを中心に、市内の子育て支援に関心のある団体が集まって開催している。

第5に、有償事業を行っている。具体的には、一時預かり、集団保育、カウンセリング、受託事業の4つの活動を行っている。

(3) 運営方法

2001年に活動を開始した「きらら」は、2005年2月にNPO法人となった。NPO法人にし



図1 きらら通信

た理由は、スタッフが多くなるなかで、野村さん個人の思いだけではすまなくなり、公共性を持たせなければならない段階にきたからだという。「きらら」をみんなのものにするために、NPO 法人にしたのである。

現在、運営に関わっているのは 29 人である。重要な事項については、理事 6 人が月に 1 回開かれる理事会において決定する。子育て広場の運営については、8 つの広場にそれぞれチーフがいて、チーフが中心となって運営している。広場のチーフ同士の会議は、2 ヶ月に 1 回くらい開いていて、広場で抱えている悩み等を相談している。有償事業の 4 つの活動に関しては、それぞれにコーディネーターがいて、コーディネーターを中心に活動している。

(4) 活動資金

収入は、主に 3 つの柱から成り立っている。第 1 の柱は、子育て支援をする側の会費である。正会員は、入会金 3 千円、年会費 2 千円。協力会員（広場でのボランティア会員）は、年間千円を支払うことになっている。第 2 の柱は、事業収入である。これは、一時預かり、カウンセリング、ファミリーサポート事業、養護施設のショートステイ事業といった、有償事業からの収入である。第 3 の柱は、寄付金である。個人と企業の二つがあり、企業では、ダイア建設、広告代理店、白梅学園等からの寄付がある。活動資金の台所事情は、ご多分に漏れず「苦しい」とのことである。

(5) 活動をする上で大切にしている点 / 困難に感じている点

野村さんに、活動を続けるコツと悩みについて聞いてみた。

まず、活動をする上で大切なことは 2 点だという。一つ目は、「無理をしないこと」。これが、細く長く続けるためのコツだという。子育て広場を午後も開催して欲しいという声があり、広場を午前中で終了するのではなく、1 時間か 2 時間延長すれば要望に応えることができる。しかし、この「ちょっと」を頑張るといふことをしないことが、大事だという。こうした「ちょっと」が積み重なることによって、どこかに無理が生じ、やがて活動が続けられなくなってしまう。活動を辞めてしまうと、ノウハウやネットワークが消えてしまい、大切な財産を流してしまうことになるので、とにかく続けることを大切にしている。そのために無理をしないようにしているのである。

二つ目は、「家族の理解が大切だということ」。スタッフは、とにかく家族を一番に考えて欲しいという。だから、もし自分の子どもが熱を出したら、その日は広場の手伝いに来なくても良い。というよりも、来て欲しくないと思っている。それは、広場のお手伝いをするよりも、まずは病気の子どもの面倒をしっかりとみることの方が、子どもにとっても、母親にとっても、大事だと考えているからである。あと、夫をほったらかしにしてもダメ。家族の協力が得られる形で「きらら」の活動に参加して欲しいとのことであった。

活動をする上で困難に感じている点は、「事務をやる人がいない」ことである。「きらら」の仕事はできるだけ分散させ、多くの人に分担してもらっている。しかし、スタッフの母親たちは、どうもお役所的な事務書類を作成するのが苦手なようで、助成金の申請等の書類を書いてくれる人がいないという。事務員を雇うほどのお金はないし、結局、代表自らがやることになり、仕事が集中してしまう。「きらら」にとって、事務作業が、難敵のようである⁶⁾。

2. 「きらら」から学ぶもの

2001 年に津田の都営アパート集会場からはじまった「きらら」の活動は、数年のうちに 8 ヶ

所で広場を開催するまでに拡大し、さらに様々な受託事業を行うなど活動の幅も広がっている。そんな充実した子育て支援を行い、勢いのある「きらら」の活動から、学ぶべき事は何なのだろうか。ここでは5つの点を指摘する。

(1) 異世代間交流 ～地域ぐるみの子育て～

子育て広場は、小学校、大学、高齢者館でも開かれている。つまり、広場の活動に、小学生、大学生、高齢者が参加することになり、子育てを通して異世代間交流がなされているのである。少子化のなか、赤ちゃんを抱いたことのない小学生や大学生が多く、この活動は彼等にとって貴重な機会となっている。また、高齢者の方は子どもたちに会うのを楽しみにしており、新たな生き甲斐の一つになっている。このように、「きらら」のいくつかの会場では、異世代が交流し、地域ぐるみで子育てするという試みがなされているのである。

実は、この形に至るまでには失敗があった。当初、津田の会場では、子育て中以外の人も参加して良いですよと呼びかけ、異世代間交流を図ろうと考えた。しかし、呼びかけてから2年たっても、結局誰も来なかったという。それなら、こちらから相手側に乗こもうということになり、学校、高齢者館での異世代間交流が実現したのである。異世代間交流や、地域ぐるみの子育ての一つの形として、学ぶべき点がある。

(2) 地域ネットワーク ～地域に根を張った組織～

異世代間交流をはじめるとあって、重要な役割を果たしたのが、地域の主任児童委員の方々だった。主任児童委員は、地域を巡るなかで子育て支援で何が大切なのかを肌で感じていたらしく、「きらら」の活動を好意的に捉え、色々なところで宣伝してくれていたという。そのなかで、三小での「ベビーきらら」は、主任児童委員が、約1年かけて校長先生と交渉し、「空き教室」での開催にこぎつけた。また、高齢者館での実施に関しては、主任児童委員と、社会福祉協議会の方々の協力で実現することができた。

こうした人達の協力が得られたのは、「きらら」が地域に根を張った組織となっていたからである。換言すれば、「きらら」の活動が、主任児童委員をはじめとする地域ネットワークの網の目の中に位置付いているということである。活動を充実させ、拡大させていく一つの要因として地域ネットワークの活用を挙げることができる。

(3) 情報発信 ～家庭で孤立した母親を連れ出す狙い～

「きらら通信」を毎月発行し、ホームページ上で全8ヶ所の広場の活動報告を毎回掲載するなど、多くの情報を発信しているという点で、「きらら」は情報発信に力を入れている。

重きを置いているのは情報の量だけではない。情報の質にもこだわっている。特に、広場への参加を計画している母親が欲しいと思うような情報を発信するよう心がけている。例えば、広場でどのような活動を行ったか、参加した子どもは何歳くらいか、集まったのは何人くらいか、親子の反応はどうだったかという情報を、時には写真付きで、紹介している。そうした情報を参考にして、母親が「自分も行けるかな」と思ってもらえるように工夫しているのである。このように、参加者であるお母さんの目線にあわせ、お母さんたちが欲している情報を発信することに気を使っているのである。

量と質の面で情報発信に力点を置いている背景には、家庭で孤立している母親を何とかして家の外に連れ出そうという狙いがある。家からなかなか出ることができず、地域の子育て情報に疎くなってしまってお母さんたちのために、「きらら」は発信し続けているのである。情報発信の大切さを伺い知ることができる。

(4) 事前予約無しの無料 ~ 2つのセールス・ポイント ~

「きらら」の子育て広場に参加するには、事前に予約する必要もないし、参加費を払う必要もない。この「事前予約無しの無料」という、参加に際しての「ハードルの低さ」を、「きらら」は「売り」にしている。

この「売り」には、2つの側面がある。一つは、参加者の裾野を広げることである。行きたいと思った時に、お金の心配をせずに、いつでも参加できる広場というのは、とても便利なものである。また子どもがぐずったり、病気になったりして急に参加できなくなっても問題がないというのは、とても都合がよいものである。この「ハードルの低さ」こそ、間口を広げることになり、誰でもが参加できるのである。このように、万人に開かれた広場であることを「売り」にしているのである。

もう一つは、他のサークル、教室との差異化を図ることである。小平市には、「きらら」以外にも子育てサークルや、英語、体操、ヨガ等々の幼児教室・親子教室が沢山あるという。その多くは、予約を必要とするものや、参加料や受講料が必要なものである。そうした地域の状況のなかで、「きらら」としてやるべきことは何かと考えたとき、家庭で孤立化している母親に手をさしのべ、支援するというスタンスに行き着いたという。そこで、「事前予約無しの無料」ということを打ち出し、本当に子育てに困っている人達のために門戸を開くことにしたのである。時間的、金銭的、精神的に余裕のある人ではなく、ある特定の人達にターゲットを絞り、その人たちのために広場を提供することで、他のサークルや教室との差異化を図っているのである。

(5) 参加者と一緒に作り上げる広場 ~ 子育て力育成 ~

「きらら」の子育て広場は、とても参加しやすい形になっている。ただし、この「ハードルの低さ」の裏側には、親の子育て力を高めるための仕掛けも用意されている。野村さんは、子育て支援を一方的に提供してばかりだと、親はやってもらって当たり前という感覚になり、結果として子育て力が低下すると感じている。従って、広場の準備や後片づけは、できるだけ参加者に手伝ってもらおうようにしている。例えば、ビニールプールを用意するために、親たちにペットボトルで水を持ってきてもらい、集会場が負担する水道代を節約するとともに、準備の一端を担ってもらっている。こうした関わりをさせることで、お母さんたちと一緒に広場を作り上げていく意識や体制を築き、子育て力を高めているのである。

おわりに

野村さんの苦しい子育て経験から始まった「きらら」の活動。苦しみを深く味わった分、子育てにはどのような支援が大切なのが分かっている。それが活かされた「きらら」の活動には、学ぶべき点が多い。それらは、子育て支援を行っている他の組織にとっても、大いに参考になるものであろう。紙幅の都合で、有償事業の詳細、ジュニア・サポーター制度等、まだまだ十分に紹介しきれない「きらら」の活動がある。それは、次の機会にゆずりたい。

「きらら」は、若く勢いがあり、まだまだ成長するのびしろのある組織である。これから5年後10年後に、どのように進化し、どのような困難に立ち向かっているのか、それを見るのが楽しみである。これからも機会を見つけて、「きらら」の軌跡を追っていきたい。

(石井久雄)

<注>

- 1) 野村さんへのインタビューは、2006年9月4日(月)午前10時30分から約2時間、都営津田町1丁目アパート集会所で行った。
- 2) 「きらら」HP「代表挨拶」(<http://homepage3.nifty.com/k-kirara/>)のサイトより
- 3) 年少人口(0~14歳)比率を比較すると、小平市は、都内では比較的子どもの多い市となっている。また、親族世帯のなかでは、核家族世帯が9割強を占め圧倒的多数となっている(3世代同居などのその他親族世帯は1割に満たない)。さらに、東京都及び全国と比べて、いわゆる専業主婦の割合が高い地域となっている(小平市「小平市次世代育成支援行動計画」平成17年3月発表)。
- 4) 前掲「きらら」HP「代表挨拶」より
- 5) 事前アンケートの回答より
- 6) 野村さんによれば、内閣府への申請は、事務作業が簡略化されていて好感が持てるという。

<参考資料>

- ・「きらら」HP(<http://homepage3.nifty.com/k-kirara/>)
- ・佐々加代子編著『みんなで育て合う 地域の子育て支援の実際と課題』 犀書房 2004年